

月夜の バスタイム

市川朔久子



*

お風呂に入っているとき、月ちゃん^{つき}がわたしに言った。

「いい？ 菜乃ちゃん^{な の}。好きな人ができたら、まっさきにわたしに言うのよ。お父さんやお母さんじゃなく」

そのときわたしは小学二年生で、甘ったれのわたしは月ちゃんに髪を洗ってもらっていた。バスルームには、あつたかいレモンの香りの湯気が満ちている。

「えー、なんで」

「なんでも。わたしがちゃんと見てあげる、その子が本当にいい子かどうか」

月ちゃんは、わたしの半分だけ血のつながったお姉ちゃ

んだ。ちょうど十ちがうから、そのころ高校三年生の十八歳だったはずだ。そして月ちゃんはとても過保護だった。

「えーっ、なにそれー」

わたしが泡を飛ばしながらけたけた笑うと、月ちゃんは真剣な顔をして言った。

「いいから。ちゃんとわたしに相談するのよ、いい？」

「やーだよー、そんなの、なんで月ちゃんに相談なん——ぶげげげげ」

問答無用でいきなり頭からシャワーを浴びせられる。ほんと月ちゃんて子どもっぽい。そんなの家族になんか言うわけないじゃない。相談するなら友だちでしょ、フツー。「あつ、わかった。月ちゃん自分がフラれたんでしょー、そうなんでしょー、だからわたしにそん——ぶげげげげ」